

専門職業人養成のための医・教連携教育

—子どもの心とからだの発育支援プログラム開発の試み—

田中 勝則（長崎大学心の教育総合支援センター）

管原 正志（長崎大学教育学部・長崎大学心の教育総合支援センター）

1. 問題と目的

様々な職種が手を取り合い、子どもの健全な成長に資するために連携による支援を展開していくことが重要であると各方面で指摘されて久しい。従来、医療と教育の連携による子どもへの支援については身体疾患を有する子どもに対して行われてきたものの、最近、その対象は不登校や発達障害等の子どもの心の面での不適応問題にまで広がりつつある（遠藤，2009）。

しかしながら、実際の現場では思いのほかこの医療と教育の両分野間での連携が困難である現状が指摘されている。その例として、「子どものために」と同じ目標を持ちながらも、背景とする専門性が異なる故に連携がはかれなかったりすることや、お互いの専門性や現場を理解できていないが故のディスコミュニケーションによる誤解も少なくないことがあげられる。こうした知識獲得の問題については、講義や文献抄読による研鑽によってその改善が期待されるが、近年、対人援助職を志す若者のコミュニケーションスキル不足も問題になっている。この問題を改善するためには、座学的な知識の獲得だけでは不十分であり、小グループ型での教育の有効性（端詰他，2006）や実際の現場の見学やそれを通じてのディベート、ロールプレイ等を導入した体験型の学習によるコミュニケーションスキルの向上（谷村他，2008）が期待される。

この様な課題を踏まえ、長崎大学心の教育総合支援センター（以下、センター）では、子どもを心とからだの両側面から理解し、職種間での連携を図りながら子どもの成長を支援することのできる職業人を養成するための医・教連携教育を行ってきた。本稿ではその取り組みについて報告を行い、その成果と今後の課題について述べることとする。

2. センターにおける医・教連携教育とは

平成15年から平成16年にかけて県下で発生した子どもに関わる事件を受け、この教育危機に立ち向かうべく平成17年4月にセンターが開設されて以降、子どもに関わる人材の養成活動は、センターの大きな活動の柱の一つとなっている。平成20年からは、将来、子どもに関わる職に就く可能性のある医学部や教育学部の学生に対する教育プログラムである「子どもの心とからだの発育

支援プログラム」の開発を進めており、この医・教連携教育はその教育活動の一環にあたるものである。今年度、このプログラムでは子どもの心とからだの発育支援について自らの専門分野（医学、教育学）以外の視点からも理解することが可能になること、また、その理解に基づいたうえでそれぞれの専門の立場に立ち、学んだ内容についてディベートを行うことで対人援助職従事者に必要となるコミュニケーション能力の向上を図ることを目的とした。

なお、先にも述べたとおり、小グループ型での教育の有効性が指摘されている（端詰他，2006）ことから、本プログラムにおける受講学生数については少人数制（医・教各学部より7名前後の参加）のゼミナール方式とした。

なお、本教育プログラムは全5つの講義内容から形成されている。以下にそれらの内容について説明を行う。

1) 相手の心を理解するための傾聴訓練（ロールプレイ）

多職種からなるチームによる支援が機能的に作用するためには、チーム内で自分の意見がしっかりと主張できることや同時に他者からの意見を傾聴し、その内容を理解しようとする姿勢が大切であるということが指摘されている（西田，2004）。また、子どもやその保護者に関わる際にも、相手の悩みや苦悩に焦点を当て、共感的に寄り添いながら話を聴くことは対人関係の職業に従事する者にとって欠かすことのできない能力である。

そこで、カウンセリングを専門とする教員が講師として「話を聴く」ことについての講義を行い、その内容を踏まえた上で傾聴のロールプレイを実施した。なお、本講義が全体を通じての講義の中で最初に行われ、お互いの人となりを理解することを相互理解に向けての第一歩と捉え、この講義内では学生間の自己紹介をグループワーク形式で行った。

2) 特別な支援を要する子どもの理解

平成19年に特別支援教育が学校教育法に位置づけられて以降、発達障害やその他の様々な障害を抱える児童生徒に対する学校教育現場での取り組みも大きく変化してきている。一方、こうした特別な支援を要する子どもたちは何も学校教育場面だけで遭遇する事例ではない。医療場面でも例えば児童精神科や療育等の領域で会うことの少なくない事例であることから、医療、教育双方に携わる者が共通した理解を有していくことが必要と考えられる。

そこで、このテーマを学習するにあたって、教育学部附属特別支援学校で行われる運動会の見学を行うこととした。見学の際の視点の枠組みとして、個々の児童生徒に合わせた特別支援学校教員の働きかけの様子や運動会プログラムの工夫等、見学前に幾つかの観察の視点を学生に自ら考えたいうえで見学することを求めた。見学後には医学部、教育学部の学生に分かれ、多様な視点からの理解が深まることを狙い、見学して感想や疑問に感じたことについて、それ

医・教連携教育 子どもの心とからだの発達支援プログラム（暫定版）



模擬カウンセリング場面を通して、子どもや保護者の心に寄り添う姿勢を体験的に学ぶ



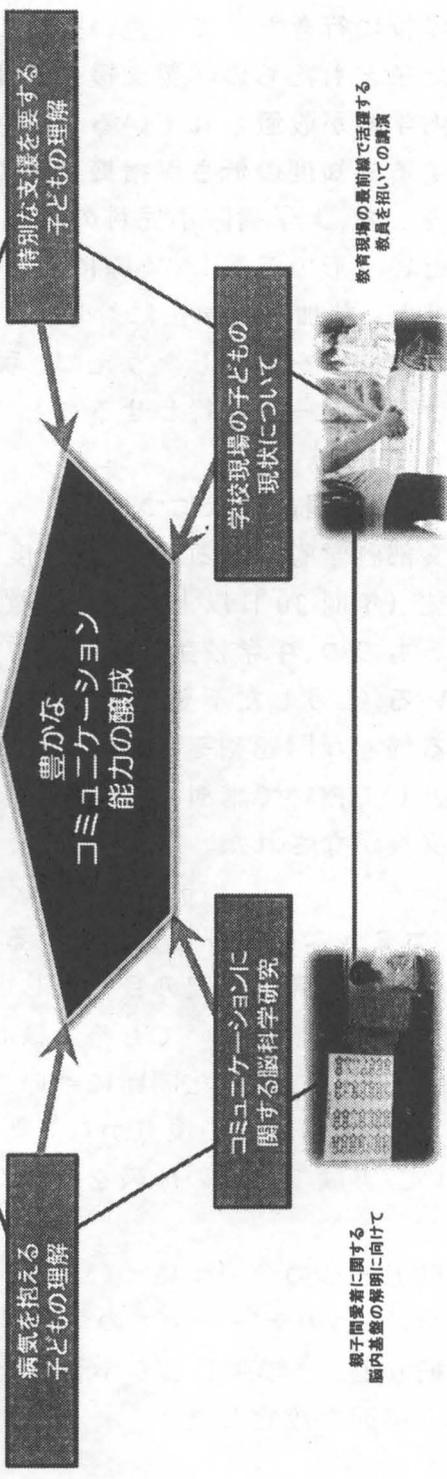
大学病院小児科内・院内学級における見学、学習補助実習



相手の心を理解するための傾聴訓練



教育学部附属特別支援学校における体育発見学習



それぞれの専門的立場からのディベートを行わせることで学習内容の定着と深化を図った。

3) 病気を抱える子どもの理解

学校に行きたくても重い疾患のために行けない子どもたちが存在する。こうした子どもたちの学習支援や集団生活機会の提供のための場として、病院内に院内学級が設置されている。しかしながら、そこでの実践内容や制度的背景に対する認知度の低さが指摘されている（谷口，2009）。

そこで、大学病院小児科の院内学級に学生を3人1組の学習指導ボランティアという形で派遣し、実際に院内学級で学ぶ子どもたちへの学習指導補助を行わせた。参加前の学生に対し、自身の専門の視点からの院内学級や病弱児への疑問や関心を整理したうえで、現場へ足を運ぶことを求めた。そして、参加後にはディベートを行わせることで学習内容の定着と深化を図った。

4) 学校現場の現状について

文部科学省による平成21年度学校基本調査結果より、いわゆる不登校児童生徒（年間30日以上欠席）数が本県においては小学校児童では減少傾向にあるものの、中学校生徒については依然として増加傾向にあることが報告されている。こうした不登校問題だけに限らず学校現場で生じている児童生徒に関わる様々な問題やその対応について、教育委員会のスタッフをゲストスピーカーとして招いて講演を開催した。講演終了後の質疑応答の時間では、活発な意見交換がなされた。

5) コミュニケーションに関する脳科学研究

近年の脳科学研究の目覚ましい進展は、人間の心のありようやコミュニケーションの様相についてもその核心に迫ろうとしつつある。主観や個人的判断に陥りがちなこうした問題について、科学的な視点からの理解を深めることを目的として、脳科学の視点から見た親子間コミュニケーションについての講義を行い、実験手続きの体験を行った。

以上5つのテーマについて、今年度は半期(前期期間中)に講義を実施した。なお、5つのテーマ全ての学習が終了した後、講義の最終回でこれまでの講義を振り返り、学生各自が学習した内容について、口頭でプレゼンテーションを行う場面を設定した。

3. 本教育プログラムの成果－学生の声より

全講義終了後、学生には本教育プログラムを受講して学んだことや感想、今後への要望についてのレポート提出を求めた。提出されたレポートを整理する

ことで、本教育プログラムがどのような成果をもたらしたかをここで検討する。

1) 講義全体を通じての感想

医学部生、教育学部生それぞれに対して、本教育プログラムを受講しての感想を求めた。その中から代表的なものを Table1 および 2 に整理した。

Table1 医学部生による本教育プログラム全体を通じての感想

<p>大学に入った時から「医学部生っぽい」人間にだけはなりたくないと思いながら過ごしてきた。なるべく医学部外の人と接する機会を自分で設けるようになってきたつもりだった。しかし、この講義の中でディスカッションを通じて、見事に医学部の視点で話している自分に気づいた。医師を目指しているのでそれ自体は悪くないと思うが、自分の中の視点の偏りに気づけたことが一歩成長だと思う。</p>
<p>医者になっても様々な「人とのつながり」がとても大事であると感じた。今回、そのつながりを得るチャンスを与えてもらったと思うので、このつながりをできる限り途絶えさせることなく、これからも大切にしていきたい。</p>
<p>教育学部の人たちの子どもたちへの関わりを見ていて、子どもに少しでも心を開いてもらえるように、言いたいことを汲み取ってあげられるようにするために必要なことを教えてもらった気がしました。</p>

Table2 教育学部生による本教育プログラム全体を通じての感想

<p>子どもたちにかかわるすべての人間が協力、連携していくことが大切だと実感した。子どもを育てるよりよい環境は学校だけが頑張っても作ることができない、改めてそう感じさせられた。</p>
<p>同じ場面を見ているのに、医学部生と自分ではまったく捉え方が違った。自分から積極的に教育以外の視点についても取り入れていくことの大切さを学べたことは大きな収穫だった。</p>
<p>講義では意見交換の場が多く取り入れられていたが、皆が人の話をしっかり聞こうとしてくれていたし、自分の意見を話しやすい空気があって、考えをまとめて話すいい練習の場になった。</p>
<p>普段は受け身的な講義が多い中で、この講義では実際に自分たちで見聞きして、また、その際に感じたことや考えたことを話し合う場があったのがよかった。何を意見してもいい安心感があった。こうした安心して意見できる雰囲気作りは、これから先、自分が教師になった際にぜひ取り入れたい。</p>

2) 各講義への感想

次に、本教育プログラム内でのそれぞれの講義についての感想を Table3～7 にまとめた。なお、表中の文末の括弧内はその意見を述べた学生の所属学部である。

Table3 「相手の心を理解するための傾聴訓練」を学んでの感想

医学部でも聞く勉強はするが、それは患者さんから診断に必要な情報を聞き出すための練習であって、患者さんの気持ちを「聴く」練習は記憶がない。患者さんの思いを聴いて、気持ちを穏やかにすることはこれから一層強く私たちに求められてくると思う(医)。

共感と同情とは異なるということを知って驚いた。感情的にならないようにするという事は思いがこもっていないから冷たいというわけではなく、むしろ、一步距離を置くことで相手の気持ちを客観的に整理することにつながるということを学べてよかった(医・教とも)。

Table4 「特別な支援を要する子どもの理解～附属特別支援学校の運動会見学」を学んでの感想

教育学部の学生は、子どもたちが活動するために学校の先生から何が手立てとして用意されているか、また、どんなふうに個々の子どもが活動しているかについて、医学部の学生は今の子どもたちの状態やどんな動きができるのかについて、医学的な視点からこの日の見学をしていたことを後日の話し合いで理解した。お互いに学ぶこと、考えさせられることが多かった(教)。

運動会の何かの競技と言えば、他人と競い合い順位を決めるものが多いが、先生方がそれぞれの子どもたちに合わせた絶妙な目標設定をした競技が行われていることに感心した(医)。

Table5 「病気を抱える子どもの理解～小児科院内学級における学習補助実習」を学んでの感想

自分が教師になってクラスの中から院内学級に通う子が出てきた場合には、その子とクラスの子どもたちとの間の連絡網になればと思った。病気と闘いながらもしっかりと勉強にも取り組み、学校に戻りたい強い気持ちを院内学級の子どもたちが持っていること、その子のことを「待っているよ」というクラスの子どもたちのメッセージを伝えていきたい。同じ教室にすることができなくても、同じクラスの仲間なのだから(教)。

授業の形式や教える先生方の苦労等、見学前のイメージとは全く異なっていた。一人ひとりの子どもたちの学校で使われている教科書に合わせての授業は大変だとは思いますが、子どもたちが学校に戻った時の負担を考えると、また、親へ安心感を与えるためにも必要なことだと思った(教)。

Table6 「学校現場の子どもの現状について」を学んでの感想

「小1プロブレム」や「中1ギャップ」といった教育現場の生の声がとても印象に残った。特に、「教室の2か所以上で問題が起きた場合、教室に教師は一人しかいないことがほとんどだから手に負えない…」という話を聞き、教師がいかに大変な職業であるかと改めて思った(医)。

全国と比較して長崎の方がいじめの件数が多いという話には驚いた。軽視できる状況ではないと思うが、逆に考えると多くのいじめを発見できているという意味では評価できると思った。きちんといじめを発見し、それを減らしていくためにできる努力が何かについて考えてみたい(教)。

Table7 「コミュニケーションに関する脳科学」を学んでの感想

<p>普段あまり経験できない科学実験ができてよかった。最近、あまり父の顔をまじまじと見る機会もなかったので、実験の時にはなんとなく気恥ずかしくもあった。けれど、両親の顔を見ると安心している自分に気付いた。自分にとっての親の大きさや大事さを改めて感じる事ができた(教)。</p>
<p>普段から両親とは仲が良いのですが、今回の実験を通してよりそのありがたみを感じることができました。実験中に母の画像を実際に目にして、どんな表情をしている母にもどこかで懐かしさと安心感を感じていました(医)。</p>

これらの感想より、本教育プログラムが学生に対して自らの専門分野にとどまらない、幅広い視野の広がりをもたらしたことが窺われる。同時に、職種間連携の重要性の認識が深まったことも読み取れる。また、ディベートを通じて自分の意見をまとめて話すことや人の意見をしっかり聞くことといったコミュニケーション能力の向上も確認される。こうした経験を通して、自分自身がこれから目指す道（医師、教師）の在り方についても考えたという声もあり、総じて今回の教育プログラムが効果的であったことが推察される。

4. まとめと今後の課題

本稿では、子どもを心とからだの両側面から理解し、多職種間での連携を行うために必要となるコミュニケーション能力を身につけた職業人を養成するための医・教連携教育の実践について報告を行った。5つの学習内容からなる本プログラムはおおむね上記の目的を達成するものであったことが窺われるが、今後の一層のプログラムの充実に向けていくつか課題を整理したい。

まず、今回の教育プログラムは、教員側でその学習内容を事前に決めて提示し、その中で学生に体験や意見交換を通じて学習を行わせる形となっていた。やや受動的な学習環境ではあったが、その中でも学生から「もっと～について学びたい」という声が講義中のディベートやレポートを通じて届いている（例えば、不登校や障害を抱える保護者の方からも話を聞いてみたい等）。

こうした声に応えるために、学部横断型の PBL 教育（Problem/Project Based Learning）を導入することで更なるプログラムの充実が図ることができるのではないかと考える。PBL 教育とは身近に感じられる出来事から自分たちで問題を設定し、その解決のために何が必要かを能動的に学ぶ自己学習の一形態であり、通常、小集団のグループで行われる（根津ら、2006）。近年、医療や教育領域にかかわらず様々な領域で用いられるようになってきた学習方法であり、その効果として、問題解決能力や職業的アイデンティティの形成、資料探索能力の向上が期待されている（磯部ら、2007）。こうした学習方法を学部横断の共修教育で用いることで、一つの事象に対して多角的な視点をもって臨むことが可能で、かつ、高度なコミュニケーション能力を有した職業人の養成が

可能になるのではないかと期待される。もちろん、そのためには各学部内、学部間でのカリキュラム調整が必要となり実現も容易ならざるものであることが予想されるが、そのようなやり取りのプロセスこそが学内連携の強化につながり、ひいては学生の学習環境の更なる向上にも寄与する可能性のあることが推察される。

また、Table1の学生の声からは、普段異なるキャンパスで学ぶ学生同士がこうして同じ場に集うことで、本教育プログラムが彼らにとっては、新しい出会いの場にもなっていたことが窺われる。本学では全学教育以外の場で学部の異なる学生が共に学ぶ機会は少なく、今回の試みはそういった点でも学生には新鮮に映った様子であった。ただし、その貴重な出会いがこのプログラムの場限りで終わってしまうようでは惜しい限りである。他職種との連携について学び、自らの職業的アイデンティティが芽生えつつある中で生じたこの新たな対人関係を維持し、継続させていくことこそが、将来、彼らが現場に出た際の貴重な人的ネットワークとなって、将来の子どもたちに対する医療や教育の充実に寄与することは想像に難くない。こうした学生の出会いを生み出し、如何継続させていくためのシステム作りについても今後検討が必要であると考えられる。

文献

- 遠藤雄策 (2009) 医療と教育の連携 (特集 発達障害児への適切な対応をめぐって) 教育と医学 57 (11) pp.1008-1017.
- 端詰勝敬, 林果林, 佐藤朝子, 久松由華, 坪井康次 (2006) 東邦大学における心身医学の卒前教育—スモールグループ型授業の試み— 心身医学 46 (8) pp711-717.
- 磯部由香, 中西康雅, 松本金矢 (2007) 『総合演習』における PBL 教育の実践 三重大学教育学部附属教育実践センター紀要 27 pp.83-87.
- 根津知佳子, 森脇健夫, 松本金矢 (2006) 教員養成型 PBL 教育の課題と展望 ~Moodle を使ったのチューター・学生の自立的活動の支援を通して~ 京都大学高等教育研究第 12 号 pp.27-39.
- 西田知佳子 (2004) 第 4 章 医療現場で働くための共通の基礎知識と技術 a. チーム医療 谷川弘治・駒松仁子・松浦和代・夏路瑞穂 (編) 病気の子どもの心理社会的支援入門 ナカニシヤ出版
- 谷口明子 (2009) 病弱教育に関する理解促進を目的とした教育プログラム—「院内学級イメージ」の変化に着目して— 教育実践学研究 14 pp.152-158.
- 谷村厚子, 井上薫, 伊藤祐子, 大嶋伸雄, 宮本礼子, 菊池恵美子, 山田拓実, 妹尾淳史, 金子誠喜 (2008) コミュニケーションスキル向上を目的とした模擬患者参加学内実習の効果 日本保健科学学会誌 11 (suppl) pp.17.